DREAM！

魔王ゴリラ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＲＥＡＭ！

【Ｎコード】
Ｎ５４６０Ｊ

【作者名】
魔王ゴリラ君

【あらすじ】
（あらすじ）
水泳日本一になるために高校で水泳部に入った拓哉。
だが水泳部は、廃部寸前おまけに副嶋　亮太によってかつあげ、恐喝、リンチなんでもありの学校だった。
その学校で、水泳全国大会優勝を目指す
ドキドキラブコメディー！

（更新情報）２月４日第１０幕更新！　２月３日久しぶりの投稿！

第９幕更新！。１月２７日ＤＲＥＡＭ！登場人物紹介ページキャラ情報追加。　１月２７日第７幕更新！小説の書き方を変えました。第７幕は、少し他と違うと思うはずです。　１月２７日第６幕更新！　１月２７日ＤＲＥＡＭ！本編突入記念ページＨＯＭＥをオープン！　１月２６日登場人物ページ更新！　１月２６日第５幕更新！　１月２５日マラソン編突入！！　１月２４日ＤＲＥＡＭ！連載開始！

ＤＲＥＡＭ！　第１幕（序章）

あれは、何年前のことだろう。
僕が高校に入学した時だった。
僕は、水泳で日本一になる。それが夢だった。
その第一歩として高校の水泳部に入ったのだった。

～クラブ活動中のプール～
「・・・オイ！壱夜。」
「ん？なに？」
彼の名前は、瀬戸内（せとうち）　壱夜（いちや）幼馴染だ！
「水泳部ってさ～俺たち２人だけ？」
「そうだね。この学校では、野球部が有名でそれと正反対でこの学校の水泳部は、大会で
１０シーズン全て最下位。このままいくと廃部かもってうわさもあるから」
「学校選択ミスったかも。俺の学力じゃあこの学校がちょうどいいって先生に言われて
たからここに決めたのにな～」
「拓哉！俺たちで水泳部盛り上げようぜ！」

自己紹介が遅れたが、俺は高校１年の大島（おおしま）　拓哉（たくや）この小説の語り手でもあり主人公でもある。この話は、高校の水泳部を日本一へと導く物語。
俺の夢（ＤＲＥＡＭ）は、日本一になること！

この高校へ来てもう１ヶ月。
学校にも慣れてきたと言う期間である。
ただ、俺のクラスは荒れていた。

クラスを荒らしている主犯は、副嶋（ふくしま）　亮太（りょうた）。
言わば昔でいうガキ大将と言ったところだろう。

ちょっとしたことで女、男関係なく暴力を振るう。
俺は、力も度胸もあるわけではない。
だからこのクラスでは、静かにしておこう。
そう肝に銘じていた。

ただ、あの出来事があってからジェットコースターのように僕の高校生活が急速に
変わって行った。

その出来事と言うのは、高校に来て2ヶ月半といった時。
こんな時になると皆に打ち解け始めたやさきに起きた出来事である。

～ある日の昼休み～
この高校にあるパン工場へ向かっていた廊下で・・・・。
廊下に人だかりが出来ている。
不審に思い覗いてみると
数名の女子と数名の男子が言い争っている。
その数名の男子の中に例の福島亮太も混じっていた。

「んだと！このやろ～」
「ちょっと謝ってくれる？」
「俺たちはな！こ・い・つ・に！肩をぶつけられたんだぞ！」
そう言って同じクラスの上宮（うえみや）　一美（ひとみ）を指差していった。
「だからって一美ちゃんを突き飛ばすことはないじゃない！」
「うるせー！」
亮太と言い争っているのは、気は強いがクラス一のアイドルである
木下（このした）　櫻（さくら）だ。

俺は、この女子が男子に暴力を振られているという事実に耐え切れなくなったのだろう。
徐々に集まってくる人ごみを避けて数名の女子の前に立った。

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第１幕（序章）（後書き）

とうとう長編に登場ですｗｗｗ

ＤＲＥＡＭ！　第２幕（福島亮太との決闘！）（前書き）

（あらすじ）
野球部エースの福島亮太は、肩にぶつかったとの理由で
女子に暴力を振るっていた。それに耐え切れなくなって大島　拓哉
が・・・・。

ＤＲＥＡＭ！　第２幕（福島亮太との決闘！）

「んだ？てめ～！」
と、亮太は荒れた様子で僕に突っかかってきた。
「こんなことして楽しいか？謝っているのに暴力をして恥ずかしくないんか！」
めったに怒らない僕でもこんなところではきれい事でも怒鳴ってしまう。
別にモテたいとかじゃなく平和主義である僕にとってはこんなやつは、目障りに過ぎない。

「フンッ！綺麗事ばかり並べやがってセンコーのクソ婆にでも頼まれたか！」
予想していたような言葉が返ってきた。
ただ、ココまで来るとバカにされた気持ちになってついカッとなって言ってしまった。
「そんなに笑うなら決闘だ！」
「・・・・・。」
辺りが静まり返る。

（け、決闘！？のＯ太の台詞かコレは・・・？）
と、亮太は心の中でつぶやく。
（えぇぇぇ！何言ってんの俺！）
予想外の言葉に周りも二人も固まる。
次に言う話題が見つからない。

だが、最初に口を開いたのは亮太だった。
「い、い、良いだろう。だがそっちから言ったんだからこっちのルールに従ってもらう。」

「お、おう」
顔から火を噴出しそうな拓哉(オレ)は、声がかすれてうまく
発音が出来なかった。

「お前何部だ？」
突然亮太が聞いてきた。
「す、水泳部」
「・・・あ、あの廃部しかけの？」
笑い出しそうに下を向きながら言う。
「何がおかしい！」
さっきの恥ずかしさも忘れてカッとなって怒鳴る。
「お、オウ！すまん！じゃあどっちのクラブが優秀か
試させてもらおう！野球ではこっちが有利。水泳ではそっちが有利。
なら公平にマラソンで勝負だ！」

（えっ？えぇぇぇぇぇ）
心の中で泣きたくなった。
なぜなら僕は、水泳以外はダメで特に走りでは
クラスで最下位から5番目ほどだからだ。
それに比べて亮太は、学年でベスト１０には必ず入るという。

「コレでも不公平か？なら1週間やろう！その間に特訓でもするんだな！
それか、コレを断るか？」
確かに後ろにいる女子のためにするようなことでも
ないが、今僕の心には怒りが積もっていた。
水泳部を馬鹿にして俺を馬鹿にしてクラスで好き勝手に暴れるコイツを
野放しには出来ない！
「やってやろう！」

「そうか！威勢だけはいいな！よしじゃあ十キロでどうだ！」
「じ、十キロ・・・分かった。」
「まぁ結果は分かってるがな！ワハハハハ！」
と、高笑いをしながら数名の男子は去っていった。

「クソ～バカにしやがって！」
そう言いながら、後ろを振り向くと
この問題の発端（ほったん）である亮太の肩にぶつかった
上宮（うえみや）　一美（ひとみ）が、僕の手を握って
「すみません。私のせいで・・・」
今にでも涙が溢れそうな顔をして話した。
僕は、突然手を握られて顔が真っ赤になった。
「いいからっ！手・・・。」
そう言うと、一美はパッと離して二人とも
斜め下を見て赤くなる。
熱でもあるのか？と思うくらい赤くなった。
鼓動が高鳴ってくる。

なぜなら、女の子と手をつなぐなんて何年ぶりだろう。
そう思っているうちにみるみる顔に出てきた。

とにかく時間がない。一週間！僕の高校入って初めての危機に直面した
時だった。
コレが、僕の高校人生を変えることになろうとは
僕でさえまだ知らなかった。

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第３幕（マラソン勝負編？）（前書き）

（あらすじ）
亮太と俺がなんやかんやで十キロマラソン勝負をすることになった。
残された時間は、残り１週間！

ＤＲＥＡＭ！　第３幕（マラソン勝負編？）

５月２日。
実にポカポカとしていて
ずっと寝ていたいと思うくらいの日曜日だ。

だが、休日と言ってもずっと眠っているわけにはいかない。
父親の頑固さを僕は引き継いでるようだ。
決めたからには、全力を尽くす。
それに、このマラソン勝負にクラスの皆が見に来ると言っていた。

朝の６時に起きて
朝ごはんを食べて準備は出来た。
いきなりたくさんは走れないと思ったので
距離は、徐々に増やしていくことにした。

向かい風を断ち切って
足を進める。昨日は、あまり寝ていないので
眠気が襲うこともあったが、それにも負けない根性だけはあった。
コレも父親譲りだろう。

タタタタタッ
だんだんペースを上げていった。
すると、
「・・・・あっ！」
上宮（うえみや）　一美（ひとみ）だ。
前回も説明したとおり亮太に突き飛ばされた
クラスメートである。
校外で合うことはなく２人とも私服だ。

一美は、走っている僕のほうへ寄ってきた。
「あの・・・私のためにこんなことになってしまって・・・よかったら
私とこれから一緒に走りませんか・・・？」
遠慮気味に言ったので最後の「か」の所は、ほとんど聞こえなかった。

一美は、おとなしい子だが結構男子に人気がある。
服装も言葉づかいも上品で話相手の気持ちもよく分かってくれる
いい子である。
「お、おう！いいけど・・・。」
一緒に走りませんか？の言葉には、いくら僕でも
戸惑ったが反射的に一美の願いを了承した。

そして、また足を進めた。
2人の足音がまだあまり人のいない町に鳴り響いた。
2人で走っていると気づくことも出てきた。
「一美さんってペース速いんだね。」
「そ、そうですか？もう少しペースを落としますか？」
「いや。別に良いよ！こっちのほうが特訓になるから。」
僕は忘れていた。
一美も女子の中では走りが速いほうだと・・・。
その後何キロか走った後休憩してまた走って休憩して
の繰り返しだった。
次の日も次の日も
水泳部で筋肉面を鍛えて
クラブ活動が終わったらまた走る。
走るときは、横に必ず一美がいた。
走るときにいろんな話をした。
そうしている内に一美を追い抜かすほどまで

走りが早くなって一美とデートのような気分になることが多々あった。

こうして気づけば約束の日の一日前まで迫っていた。

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第４幕（マラソン勝負編？）（前書き）

（あらすじ）
一美と練習を続けてきた拓哉は、とうとう明日マラソンをするということになっていた。
いったいどうなるのだろうか？

ＤＲＥＡＭ！　第４幕（マラソン勝負編？）

「はぁはぁはぁ・・・」
午後９時を過ぎたぐらいだろうか。
街灯も付いたり消えたりを繰り返している。
人は、あまり会わなくなった。そんな所に２人の足音と呼吸がバラバラに聞こえていた。
「今日は、この辺でいいか・・・」
僕は、一美に同意を求めた。
「・・・うん。」

今日は、週末なので特別用事もなかったので
ほとんど走っていた。
もちろん一美も一緒に。
一美と僕は、少し歩いた所にある公園のベンチに座った。
僕は、近くにあった自動販売機でジュースを買ってベンチに座った。
そのベンチは、街灯に当たっていてベンチが光っているようにも思えた。

「一美さんって友達っているの？」
「・・・・。」
（やべっ！失礼だったか・・・）
つい口が滑ってしまい
失礼なことを聞いてしまった。
沈黙が続いた後に以外にも一美から口を開いた。

「いますよ。櫻ちゃんと、希ちゃん。」
それは、木下（きのした）　櫻（さくら）
小浦（こうら）　希（のぞみ）の名前だった。

コレは、前に亮太の事件のときに一美をかばっていた
メンバーだった。

これも失礼と思いながらもこんな質問も聞いてみた。
「何部に入ってるの？」
「私と櫻ちゃんと、希ちゃんはまだ部活には入っていません。
3人一緒の部活に入りたいのですが、まだいいところがないって言うか・・・。」
「そうか・・・。」
俺は、考え込むように空を見上げた。
「拓哉さんは、水泳部ですよね。やっぱり・・・き、厳しいのですか？」
少し遠慮したように聞いてくる。
この厳しいという言葉は、廃部寸前の水泳部を表している。
「あぁ。部員がいなくて大変だな～」
「そうですか。」
何かを考えるように下を向く。
「明日は、がんばってください。応援しています。」
「お、おう！」
「あと、拓哉さんってやさしいんですね。こんなに私の話を聞いてくれた男の人は
拓哉さんだけです。」
そう言って一美は、去っていった。
「・・・・。」
少し僕は、照れくさかった。

次の日。
「集合場所は・・・。川だったな。」
そう。今回のコースは、川の周り十キロである。
いろいろつぶやいた後

用事を済ませて自転車に乗って
川に向かった。
風を切って順調にスピードに乗る自転車につかまって
坂道や交差点を突っ切っていく。
目的地には、自転車でほんの十分ほどで着いた。
目的地（スタート）には、うわさを聞きつけたクラスメートなどが集まっていた。
一美との特訓で少しは自信のついた僕でも少し緊張してきた。
まだスタートもしていないのに息が切れそうだ。
僕は、携帯を見た。
（まだスタートまで15分ほどあるな・・・。）
心の中でつぶやいていると、一人の男が肩をたたいた。

「！？」
びっくりして振り向くと
そこには、今回の敵でもある亮太が立っていた。
「逃げ出したんだと思っていたぜ！」
むかつく様な口調で亮太は、僕を挑発してきた。
「僕も一美と特訓したんだ！お前こそ俺に挑発しないと緊張して
落ち着かないんじゃないのか！」
怒鳴るように言い返す。
「えっ？あの一美と？ワハハハハッ！ダッセー！
女に特訓してもらってるわけ？ワハハハハ！」
カーと顔が赤くなったが言い返す言葉が見つからない。
「絶対！負けないからな！」
そう言い残し俺は、その場を立ち去った。

そして・・・そのときはとうとう来た。
「はーい。スタートするから2人ともスタートに並んで。」
どちらが、勝つのか？
野球部エースと水泳部エースの戦いが始まろうとしていた。

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第５幕（マラソン勝負編　最終章）（前書き）

（あらすじ）
とうとう始まったマラソン真剣勝負！
どちらに軍配が上がるのか！？

ＤＲＥＡＭ！　第５幕（マラソン勝負編　最終章）

川の周辺は、丘状（おかじょう）になっていて
その丘の上からスタートをする１０キロマラソン。
（朝起きたときは、ポカポカしてたのに緊張して肌寒いな・・・。）
スタートの線に並びながらつぶやいた。

もう、いつでも「よーいスタート」と言っても
いい状態になってより緊張が増してくる。
ココまでになったら早くスタートをしたいと思うようにも
なってくる。
見学席には、一美の姿が見当たらない。
（トイレにでも行ったかな？）
そこまで気にしてはいなかった。
まさか、こんな契約が交わされていたなんて
想像も付かなかった。
それについては後に話す事になる。

さて、話をレースに戻そう。
２人並んでいる横で笛を持った人が立っている。
笛は、体育の先生が持つような白い笛だ。
笛を持った人は、口に笛を含んで
「よーい・・・・」
ピー
耳が痛くなるような大きな音で
スタートの合図を鳴らして２人は、ゆっくりと
走り出す。
僕も亮太も最初から本気では
体力が、もたない事ぐらいは想像は付いている。

見学席からは、応援の声も聞こえるが
ほとんどが拓哉(オレ)に対する侮辱の言葉だった。
「拓哉～立派に負けろよ～」
「拓哉が負ける試合なんて見る必要ねーよ！」
と、こんな感じの声が多く聞こえた。
恥ずかしくなって
まさしく穴にも入りたい気分になった。

それでも少しづつペースも上げていった。
一美との特訓の成果もあって
自分でも体力は上がったなと思うようになっていた。

前半では、接戦(せっせん)になった。
追い抜き追い越し
そのたびにおもしろ半分で付いてきている
見学者の応援の声が大きくなる。
だが、すぐに予想済みのことが起きた。
1週間訓練したからと言って相手が悪すぎた。
すぐに体力に差が出てきて息切れも出てきた。
だが亮太は、スタートのときと同じで安定した走りを
見せていた。

差が開く一方で、つまんなくなったのか
付いてきた見学者の数も減ってきている
ことに気がついた。
（まだあきらめないぞ～）
心の中で叫んだ所で体力にも影響は出ない。
それどころか確実に体が悲鳴を上げ始めていた。
それでも折り返し地点を過ぎて残り2～3キロ

と言った所だろう。
訓練のおかげでなんとなく亮太の影が見えるぐらいの
差ですんでいた。
（訓練がなかったら俺は、もっと後ろを走って
いたんだな・・・）
一美の存在がなかったら
訓練は続けられなかっただろう。
一美にも感謝しながら足を進める。

さすがの亮太も疲れがたまってきたのか
ペースが落ちてきた。
まぁ僕も人の事は、言えないのだが。
残り1キロぐらいだろう
ココぐらいになると最後の力を振り絞って
走る距離である。
だが、さっきまで見えていた亮太の姿が見当たらない。
さっきまで見えていたのでおかしいなと思いながら走っていた。

もうほんの何百メートルでゴールと言う
ところで、あることに気がついた。
「地面に何かいる・・・？」
近づいてみると、
「！？」
僕は、目を疑った。
足をパンパンに腫(は)れさせた亮太が、地面に
倒れていた。
「おい！大丈夫か！」
と叫ぶと亮太から回答が来た。
「俺は・・・まけたくね～よ・・・俺は・・・
まけたくね～よ」

泣きながら返答してきた。
痛さより、今走れないと言うことに泣いていたのだろう。
クールな亮太にもこんな一面があるなんて。
僕は、思った。
本当は、亮太って悪いやつじゃないかもしれない。
他部(たぶ)を侮辱するのもそれだけ自分の部活
を愛している印。
ただ、他の人よりコミュニケーションが苦手なだけで
殴ったり、侮辱と言う方法しかとらないだけであって
本当は、泣きたい時だってある
「ただの人だったんだな。」
最後に心に思った言葉がつい口に出てしまった。

そして、僕は肩を貸した。
亮太を背負ってゴールへ向かう。
「ありがとう。そして・・・・ごめんな。」
それを最後にゴールまで亮太は、何も言わなかった。

ゴールでは、2人のゴールに涙を流していた人もいた。

これが、亮太と仲良くなったときであった。

つづく

ＤＲＥＡＭ！登場人物紹介（前書き）

物語は、ここから始まります。
簡単に言えばココまでが序章です。
今回は、登場人物紹介です。

DREAM！登場人物紹介

大島（おおしま）　拓哉（たくや）・・・主人公であり小説の語り手でもある。
水泳部の部長。
専門はクロール。
実は、櫻の事が気になっている！？

内村（うちむら）　力也（りきや）・・・水泳地区大会２度の優勝を誇り
ここら一帯の不良の頭。不登校。
専門はクロール。

副嶋（ふくしま）　亮太（りょうた）・・・暴れ者だが心優しい野球部エース。

木下（きのした）　櫻（さくら）・・・学年一の美女。気は強いがしっかり者で優しい。
綺麗好きでもある。小学校で４年間スイミングクラブに所属。専門は平泳ぎ。
実は、拓哉の事が気になっている！？

小浦（こうら）　希（のぞみ）・・・明るい性格で櫻に並ぶ美女でもある。
専門は背泳ぎ。

瀬戸内（せとうち）　壱夜（いちや）・・・最初から拓哉と水泳部にいた副部長。
拓哉とは、幼稚園からの付き合いだとか・・・。
専門はバタフライ。

上宮（うえみや）　一美（ひとみ）・・・おとなしくて上品だが、

裏では力也との関係がある
謎多き美女。
専門はバタフライ。
実は、拓哉の事が気になっている！？

これからもキャラは増えていきます。
そしてこれから本番です。
これから話が面白くなります。

魔王ゴリラ君小説を明日も見てくださいね☆
毎日書く予定です。

ＨＯＭＥ（前書き）

ＤＲＥＡＭ！の公式ホームです。
魔王ゴリラ君の日記や注意書きが書いてあります。

HOME

（注意書き）
この小説は、コピーもしくは他ブログに無断で
載せることを固くお断りしています。
許可をとる場合は

ｇｏｒｉｒａ１０１０９３１@ｇｍａｉｌ．ｃｏｍ

に、許可を取ってください。

（サイト）
魔王ゴリラ君のサイトです。
ブログ・・・ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｍａｏｕｇｏｒｉｒａｋｕｎｎ／
公式ＨＰ・・・ｈｔｔｐ：／／ｒａｎｎｋｉｎｎｇｕ．ｉｅ－ｙａｓｕ．ｃｏｍ／
ブログのみの回覧者数トータル１万５０００人突破！！（本当です。）

（ブログ）
１月２８日第６幕は、よく意味が分からないと言っているあなた！
大丈夫です。これから少しづつ分かっていきます。
１月２７日　今日も学校行って来たよ～
前ＹＡＨＯＯ！の知識袋で多く誤字訂正の依頼
が来ていたので土曜に訂正予定です。
後今日から小説ブログ開始！
これからも変わったことに挑戦していきます！！

ＤＲＥＡＭ！　第６幕（裏の顔）（前書き）

（あらすじ）
亮太とも仲良くなった。
長い序章を終えとうとう本編に突入します。
では、お楽しみください。

DREAM！　第6幕（裏の顔）

そこまで気にしてはいなかった。
まさか、こんな契約が交わされていたなんて
想像も付かなかった・・・。

これは、拓哉(オレ)が川岸に到着する10分前の出来事。
プルルルル。
一美は、一足先に川岸へ着いていた。
その一美の携帯が大きな音で鳴り響いた。
「どなた？」
携帯を耳元へ持っていって
聞いてみた。
「オレだ・・・内村(うちむら)　力也(りきや)だ・・・」
「！？あんたから話し掛けてくるなんて中学校以来ね。」
「君と会いたい。例の作戦を実行する。」
「了解。戸野山高校(とのやまこうこう)に幸運があると良いわね。」

一美は、その後川岸から歩いて15分ほど先にある内村(うちむら)　力也(りきや)
と言う男の家に向かった。
力也の家は、立派な建物だ。
ここでは有名な内村財閥の跡継ぎである力也は、その財力や自身
の力で
学校や不良共を押さえつけていた。
けんかもかなり強くとうとう不良の頭にまで
登り詰めた。言えば勝ち組である。

一美が、力也の家まで着くには時間がかかりそうだ。
家に着くまでに力也について話をしておこう。

ー力也の中学生時代ー
「瞬泳の内村選手全国水泳大会予選敗退です！」
テレビから全国にそんな言葉が流れ出た。
力也は、ここ大阪では瞬泳の内村と言われて
県大会クロール１００Ｍで、２位の成績をたたき出した。
だが、世界は広かった。
全県から優秀なスイマーが集まる大舞台では
そんな実績は無駄だった。
実績はあっても
県大会では感じなかったプレッシャーが襲い掛かった。
その敗北から力也は変わった。
不良共と飲み遊ぶ日々。
大会がある日は、権力で
表彰台を独占した。
そして今回も・・・

ー現在ー
一美は、力也の家に上がりこんでいる。
「一美。今シーズンの作戦は、この通りだ。
地区大会に出場する全校に我々のコマを置いてある。
そして、出場選手のデータを盗んで来い！お前のいる高校は
最弱の高校だが油断は禁物だ。」
「はい、はい。」
そう言って立ち去ろうとした一美の手を力也は握った。
「ちょっとやっていくか？」
そう言いながら、ベルトに手をかける。
「・・・・。うん。」
こうして、力也の標的（ターゲット）に俺たちの

高校が指名されてしまった。

少しづつ歯車が狂い始めていた。

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第７幕（作戦始動！？水泳部にもぐりこむ影）（前書き）

（あらすじ）
地区大会に出場する選手のデータを集める力也。
これは壮絶な水泳小説の始まりだった。

ＤＲＥＡＭ！　第７幕（作戦始動！？水泳部にもぐりこむ影）

キーンコーンカーンコーン

「終わったか・・・。」
授業の終わりを告げるチャイム。
皆授業が終わったことによって
ホッと息をつく。

「拓哉。先に部活行っとくぞ！」
壱夜は、そう言うと人より先にプールへと向かった。
今日で６月。
だんだん暑さも覚える月でもある。

水泳部では、筋トレも終わりプールに
入っている時期でもある。

「今シーズンは、大会無理かもしれない。」
あきらめたようにささやく。

なぜなら部員はたったの２人。
こんな人数で勝ち残れるほど水泳界もあまくない。

少し肩を落としながらプールへと向かう。
ため息を何回ついただろう、いつもよりかばんも重く感じる。

ガチャン

プールへ入るための鉄のドアを潜り抜けて

更衣室に向かう。
男子更衣室では、壱夜が先に着替えていた。
僕は
「鍵、職員室から取ってきてくれたんだな。ありがとう。」
と、一礼すると疑問があるかのように首をかしげて
「えっ！鍵開いてたぞ！」
「あれ？そうなの？」
二人とも頭に「？」が出そうになっていた。
「まー。いいやっ！」
考えるのは苦手な二人は、考えるのをやめた。
「そーだ！掃除しないと！この部活女子がいないから
女子更衣室って汚かったよなっ。」
と、僕は壱夜に問いかける。
「おぉ～。そうだったな！ついでにトイレとかも
やっちゃおうぜ！」
壱夜は、乗り気だった。
というわけでパッパと終わらしたい俺たちは、
倉庫からほうきとちりとりを取り出して更衣室に向かった。
「パッパと終わらせようぜ！」
「そうだな。」
ところが、今皆さんが予想しているとおり
パッパと終われないことが起こるのです。
更衣室に足を入れた瞬間
固まった。

大きな見開いている胸を強調している
3人の女子が着替えていた。
それも、どこかで見たことがある顔が揃っていた。
「すみませんでした。」
そう言いながら、更衣室から出て行った。
女子たちも予想外のことに固まっていたので
悲鳴も上げれなかったようだ。

だが、その後気まずくなった。

「でもなー！何でお前らが水着きてんだよ！」
「なによ！あたし達が水泳部に入っちゃダメって言うの？」
櫻が聞いてくる。
「へっ？水泳部に入る？」
「そうよ！」
「・・・・でもなーお前ら泳げんのか？
それに俺たち亮太の事件の時しかあったことのない他人だぜ」
「私の胸見たくせに何が他人よ！」

それを見た周りの人は口をそろえていった。
「夫婦みたい・・・。」

「で、実際泳げんのか？」
「櫻ちゃんは小学校の時水泳を習ってました。」
一美が答えた。
一美の時は、特訓の効果のようで親密に話が出来た。
櫻とは大違い・・・。
「じゃあ櫻！泳いでみろよ！」
「もぉ～！上から目線？」
「いいからっ！お・よ・げ！」

「は～い。部長・・・。」
いやいや飛び込み台に上る櫻。
「ハイッ！」
その叫び声と同時に飛び込んだ。
僕も驚くほどでつい思ったことを口に挟んでしまった。
「イルカみたいだ・・・」
あまりに飛込みが綺麗過ぎて皆が息をのんだ。
今だけは、櫻がかわいいと思えるかもしれない。
そして、櫻は足と手を広げ平泳ぎをする。
綺麗でしかも早い負けず嫌いの僕が、初めて得意の水泳で負けたと思った瞬間だった。

泳ぎ終わった後頭につけたキャップを取って
ショートで薄ピンク色の髪をなびかせていた。
ドキンッ
（女の子を見てドキドキするのって久しぶりだな。）
おそらく壱夜も同じだろう。
櫻に見とれている。

これが、僕の恋物語の始まりだった。

希も一美も櫻も僕らの想像を超えていた。
クラブ活動後、僕は途中まで櫻と帰ることになった。
「ごめんね。急にこんなことになちゃって。」
さっきとは大違いの口調で話しかけてくる。
「別に良いよ。でも、何で水泳部に？」
前、一美から部活に入っていないことは聞いていた。
だが、なぜ水泳部を選んだのかが不明だった。
「一美に誘われたんだ。でも、今は水泳部に入ってよかったなって

思っている。」
「何で？」
「さーなんでででしょう？内緒だよ。」
そう言って分かれ道で
「また明日！」
と言って櫻は帰っていった。

まさか、部活でこんなたくさんの女子に囲まれることになるなんて。
少し興奮してきた。

「ただいま～」
玄関のドアを開けた。
家に帰ってベットに寝転がったのと同時に
ポケットから携帯を出し開けた。
「壱夜からメール？」
メールの中身を見たとたん吹き出した。
「拓哉～！水泳部の３人の女子の中で好みは誰？」

「何だよコレ？」
そう叫んだ。
でも思えば、女子のことを考えたのは
中学生以来だったな。

すると、パタンと携帯を閉じて
「自主トレでもするか・・・・。」
そう言って外に出て行った。
近所を何周か走るのだ。

（今は、水泳部が大事だ。恋愛はその後だ。）

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第８幕（最大のライバル内村力也　登場！）（前書き）

（あらすじ）
櫻、希、一美が入部したことによって
大会優勝の希望が見えてきた。
だが、裏では力也や一美の手によって
優勝台独占計画が始動していた。

ＤＲＥＡＭ！　第８幕（最大のライバル内村力也　登場！）

朝。
清々しい風が吹いている。
拓哉は、ベットの上で伸びをして学校へ向かう。

まだ眠気も取れていない。
「は～ぁ。眠いな。」
歩いていくと
「あっ！拓哉君！」
と、声がした。

振り向くとそこには櫻が立っていた。
「お前って＜君＞をつけて相手を呼ぶタイプだったけ？」
櫻に疑問をぶつける俺。
「ううん。」首を振って答えた。

「じゃあ何でだ・・・・？」
と言った瞬間
「あっ！今シーズンの水泳地区大会エントリー学校を見た？」
俺の言葉が櫻の言葉にかき消されてしまった。

「見てコレ！」
と言ってメモ帳を出した。
そのメモ帳には、数校ほどの学校名が記されていた。

「すごい！この学校全部水泳の名校じゃないか！」
「そんなの問題じゃないよ！この高校を見て！」
櫻がある一校を指差した。

そこには、
戸野山高校（第６幕に登場）と、書いてあった。
「この高校がどうしたの？」
「ばかね！ココには、力也って子がいるの！」
「力也？」
「そう、力也はこのメモ帳に書いてある全ての高校に
偵察員を送って自分の高校を水泳大会で必ず優勝するように
しているのよ！」
「そんな！水泳大会関係者が許すはずがない！」
そう投げかけると
肩を落としてため息をつく。

「お金よ・・・。」
「金？」
「そう、力也はここらでは有名な財閥の跡取り息子。
関係者でも，うかつに手が出せないってこと。」
拓哉は納得したようにうなずく。
「だから、うちの高校にも偵察員が回っているはずよ。
誰かは、分からないけど・・・」
「誰であれセコイ手を使うやつの仲間だろ！
ろくなやつじゃないぜ！」
拓哉は、怒りながら足を進めた。

そして、今日から水泳地区大会優勝に向けての
３人の女と２人の男の特訓が始まろうとしていた。

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第９幕（地区大会編　１／７）（前書き）

（あらすじ）
エントリー校のひとつ戸野山高校。
エントリー校の中でも地区最強の内村力也がいた。
偵察員を送り込むと言うのに激怒した大島拓哉がいた。
少しづつ物語が進む。

ＤＲＥＡＭ！　第９幕（地区大会編　１／７）

「終わったー！」
僕は、授業の終わりのチャイムと同時に叫んで
机に顔をつけた。
その顔は、疲れて少し老けた？と思わせるようになっていた。

僕は、鞄をもってプールへと向かった。
その足取りは、重かった。
「内村力也か～・・・今年も最下位だな。」
小声で言った。
確かに偵察員という
セコイやり方とはいえ腕は、確かのようだ。
後から知ったことだが、力也は全国大会に出るほどの実力。
全国では、負けてろくに練習もしていないらしいが
少なくとも僕らとは、次元の違う世界にいる人間だと言う
ことは確かだ。

そう思っているうちに
プールに着いた。
そこには、水着の女子と男子が一人いた。
「おい！お前ら早くないか？部活始まるまでまだあるぜ？」
はぁ～と、皆が肩を落としてため息をついた。
「あんたね～それだから毎年この水泳部が最下位なのよ！」
「えっ！」
僕に最後の一撃の言葉を櫻が言った。
最下位という言葉は、今の僕達にとって
最大のダメージである。
そんな櫻に希や一美もそして壱夜もうなずく。

「時間がないんですよ。拓哉さん。」
一美が気を使うように言う。
なぜか、一美が言うとあらゆる言葉が正しく
聞こえるのだから不思議だ。

バシャン
いろいろ考えている内に先に着替えた
部員が飛び込み台から飛び込んでいく。
「おいいいい！待ってくれよ！」
僕は、あわてて更衣室に急いだ。

「はぁはぁ・・・・。ふぅ～着替えるか。」
息を切らして更衣室に入る。
そこには、もう先に着替えた人の衣類がおいてあった。
「ん？誰のだコレ？」
そこには、見慣れない下着がおいてあった。
着替えは、３つ置いてあった。
「あれ？男子更衣室を使うのは、壱夜一人なのに。」
辺りの匂いをかぐと
ほのかに香水のような甘い匂いが・・・。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
ここで僕は気づいた。
慌てていたので
男子更衣室と女子更衣室を間違えたことを。
僕は、慌てて女子更衣室の横に位置してる
男子更衣室に急いでいった。

そのころ。
力也家では、動きがあった。
「まさか、櫻があの水泳部にいたとは

誤算だった。」
力也は、その重たい足を
拓哉の高校に向けていた。
「もう、誰にも止められない。」

つづく

ＤＲＥＡＭ！　第１０幕（地区大会編　２／７）（前書き）

（あらすじ）
今シーズンの大会に向けて
あわてている拓哉達。
その裏では、力也が動き出していた。

DREAM！　第１０幕（地区大会編　２／７）

校門。
まだ紹介していなかったが
拓哉の高校は、瀬戸川（せとがわがくえん）学園。
結構なエリートが揃っている高校でもある。

その校門に見慣れぬ者が立っている。
いや、言い争っている。
相手は、うちの学園の生徒
マラソンの時に僕と仲がよくなった福島亮太である。

「んだてめー？何見てるんだよ！」
亮太がその見慣れぬ人につっかかる。
「その姿は、野球部のエース福島亮太だな。」
ニタリと笑いながら聞いてくる。
「だ・か・ら！お前は誰だ！」
「・・・・。」
相手は、今でもきれそうな亮太の質問に答えない。
大声で言い合っているせいか周りの人が集まってくる。
「フッ。いずれ分かる。どうだ俺と勝負しないか？」
相手は、やっと口を開いた。
「勝負？」
「そうだ。お前が３球投げて俺が全てホームランゾーンに打ち込めば俺の勝ちってことだ。」
「野球の勝負？望む所だ！」そして２人は、グラウンドに向かった。

ーそのころプールではー
「フー。もうあと一時間もすれば

プールから上がるか。」
一休みをしている僕がタオルで体を拭きながら
呼びかける。
「えー！もうそんな時間？」
皆、口をそろえて言う。
「あせってもしょうがない大会では
全力を降り注ぐだけだ！」
「はい、はい。」
僕の熱血ぶりは皆に認められず
スルーされる。
その後、また泳ぎだした。

今、まさにグラウンドで大変なことが
起きているとも知らずに・・・。

「おーい上がるぞ！」
その掛け声と同時に次から次へとプールから
上がってくる。
バックを背負い解散する。
「さようなら！」
いつもと変わらないクラブ活動だったはずなのに・・・

プールを出てすぐ側にあるグラウンドを見た時
櫻と一美の顔色が悪くなった。
それと僕には聞こえた。
一美の
「り、力也・・・？」
と言う声が。
僕も、一つ驚くことがあった。

亮太が、地面に足をつけて敗北感に浸っている光景が・・・・。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5460j/

DREAM！

2010年10月9日18時29分発行